フェアの精神と資本制社会との相性

近藤良樹

1. 戦いの倫理

われわれの社会は、資本主義の社会であるが、この資本制の経済活動のもとで、最近、フェアという言葉をしばしば耳にするようになっている。あくまでも私的な利益のために「おかねもうけ」のために動く資本と、公平・公正を意味するフェアの精神とは、一見すると相容れないようにも思える。資本家・商売人というと、「死の商人」のように、もうけのためになら、大量殺人が行なわれようと国がどうなろうと平気といった、きたない存在、みにくい存在とのイメージが歴史のなかに残っている。このあくまでも私的な利益のためにのみ活動する資本と、公平できれいなフェアの精神とのかかわりを以下に少し問題にしてみたいと思う。

ところで、フェアとは、そもそもいかなる特徴をもつのであろうか。ひとが「フェアにやろう」というとき、その「やろう」「しよう」という活動は、いかなるものになるのであろうか。会食をするとか、遠足をするとかの、ひとが和し協力・協調するような状態において、これをいうことはない。話し合いをするとき、「フェアにやろう」というと、敵対するものの間での論争・論戦といったものを想起することであろう。つまり、フェアは、戦いの場面にいわれるのである。現在、フェアという言葉が一番良く使われるのは、スポーツにおいてである。「模擬戦」としてのスポーツ競技において、その戦い方の公正さ・公平さをフェアというのである。フェアは、闘争・競争の倫理である。経済活動においてフェアがいわれるのも、そこでの競争や戦いについてである。

闘争や競争は、だが、かならずしも、フェアになるとは限らない。戦争などでは、フェアだ、公正だといってはおれないこともある。戦いの徳としては、正義やフェアの他に、勇気だとか、節制・克己などもあげられる。戦争では、勇気や克己は、各戦士にまちがいなく求められる徳となるが、フェアは、かならずしも求められない。きたない手であっても、勝利すればいいのだということもできる。

スポーツでフェアをいうのは、ルールにしたがう、法にかなうということであり、さらに、ルールになくても、相手と対等以上の手はひかえて公平な手段で正々堂々とたたかうということである。戦いには、それをなりたたせている諸条件があり、戦いを純粋にするには、その条件を可能なかぎり同一に対等にすることが必要である。その基本的なものは、ルールとして明文化されるから、ルール遵守が基礎的なフェアということになる。ルールにはなっていない、したがってかならずしも守られなくてもよい一層の公平さ・平等を達成しようとするフェアは、基礎的なフェアのうえにそびえる高貴なフェアということになる。戦う双方の、戦いの条件の対等化・平等化を求めるフェアは、戦いを純粋にするものであるとともに、ルールで縛り、対等以上の手を使用させないものとして、戦い方を限定・制限するものでもある。なにがなんでも勝利すればいいのだというような戦争においてフェアがかならずしも、勇気のように求められなかった由縁である。

勇気とか克己は、今日、あまり、正面きった社会的な問題にはならない。それは、各個人のうちにとどまる徳である。それに対して、フェアは、正義や愛あるいは、ケアなどとともに、相互のあるべきふるまいとしてあって、それらが機能しているところでは、その作用を受ける人達があり、社会的なものとなるので、話題となり、問題としてとりあげられやすいものになるといえる。われわれの競争社会で、フェアがしばしば話題になる理由の一つは、ここにある。また、スポーツにしても、この競争社会にしても、戦争とちがって、生命を奪い合うようなものではないから、生命をうばわれることを前提にした「勇気」とか「克己」は必要としていないことがある。さらに、不正義の相手を倒し懲罰を加えるという正義の戦いといったものではなく、一応の正義は前提にしての経済競争であり、模擬的な戦いとしてのスポーツであるから、「正義」もよほどあくどい話以外では出てくる番がない。しかし、フェアはというと、スポーツではルール遵守としての基礎的なフェアがなくては競技そのものが成立しないし、経済活動も、競争がきびしくなればなるほど、公正なルールを立てて、これの枠内でというフェアな活動をするのでなくては、無秩序になって混乱をひきおこす。現代は万人の自由と平等をうたう民主主義の時代でもある。この民主主義下の現代の競争社会においては、戦い・競争が広汎になればなるほど、激しくなればなるほど、これを厳格に民主的に、つまり対等に公平にということになって、「フェア」のことばを耳にする機会もそれだけ多くなっていくのではないかと思われる。

2. 競争と闘争

資本主義は、封建制社会などとちがい、自由な実力主義の社会であり、他の体制にくらべて組織や個人のあいだで競争が顕著に見られる社会になる。そしてこの競争において、フェアがとりざたされるのである。

ところで、資本制は、競争社会ではあっても、かならずしも闘争の社会ではない。フェアは、戦いの倫理であるが、この戦いは、闘争と競争いずれをも含んだもので、フェアは、闘争のもとでも、競争においてもいわれうる。競争と闘争は、同じ戦いではあるが、その形式が大きく異なる。

スポーツのばあいでいうと、闘争は、ボクシングや柔道のように、相手に直接自分の力を加え攻撃し、打撃を与えて打倒しようとするものである。自己の心身の能力をそのスポーツの形式のなかで発揮していくのだが、その能力とは相手を直接に攻撃し打倒する能力である。自分の加える打撃は、相手にはそのままダメージとなり、逆に相手が加えた自分への打撃は、自分のダメージとなる。これに対して、競争は、徒競走などの陸上競技あるいは水泳のように、その行為は、競争相手に向かうものではなく、そのスポーツに固有の目的へと向かい、目的またはその手段に各自が別々にかかわり、走ったり、泳いだりという能力を最大限に発揮して行こうとするものである。競争する者同士は、並んで、その発揮されている能力を比較しあい、相手より優れた状態にと一層力をふりしぼって行こうとするが、闘争のように相手に直接に力を加えてこれを妨害・攻撃するものではない。その点では無関係になっているといってもよい。槍投げとかスキーのジャンプなど並んで競うものすら存在せず、一人での競技となる。なお、競争と闘争を混合したも

のもある。サッカーなどは、ゴールにボールをいれるという競争であり、そのことを相互に阻止し妨害する闘争でもあるという両面をもつ。

闘争では、相手を自分の攻撃力でもって直接、打倒・破壊することが目的になるから、相手を自分の力で助けるとか、手をつないでというようなことは、目的に反するものとなる。だが、競争の方では、相互に妨害しつぶしあうようなことはかならずしもなく、むしろ、おたがいのもつ能力を一層発揮するためにリードしあうのである。場合によると、それが勝負に直接的影響のないものなら、ささえあい助け合うこともあろう。

フェアにおいては、対等以上の形での自分のみに有利になるような戦い方については、これを制限して、自分の手をしばることになるから、闘争のばあいは、それは、直ちに、相手を利するものとなる。闘争のフェアでは、それによって戦いの限定されるそのマイナス分だけ、直接に敵を有利にし、いわばその分を敵にプラスすることになる。これに対して、競争のもとでのフェアは、かならずしも、相手を有利にすることにはならない。フェアにすることで自分の活動については制限し、手を縛るのだから、それは、自分の能力発揮にはマイナスとなる。しかし、その分がただちに相手の方にプラスされるわけではない。並んでいる競争相手の能力発揮をその分増加することにはならないのである。順位という点では、自分の成績点が少し落ちるから、その分、競争者の一部のものには、有利になることはあろうが、それでも、その一部のものの能力発揮そのものには、影響ないはずである。

ということであれば、闘争の場合、ルール遵守としてのフェアは、そのスポーツ競技そのものをなりたたせるために必要で守らざるをえないが、自分のフェアはただちに相手の有利につながるのであるから、守られなくてもよい高貴な美的なフェアについては、よけいなこととして、まもることを躊躇させることがありそうである。これに対して、競争においては、かならずしも、相手を有利にするわけではないから（自分の成績の点では大体が不利にはなろうが）、ルール遵守のフェアせよ、ルールではないが守ることが望ましい高貴なフェアにせよ、フェアにふるまうことについての抵抗は少ないといえよう。

ただし、フェアが目立つのは、闘争の方になるかもしれない。相手を倒すには、少しでも有利にと、ときにはルール違反にさえさそわれる。フェアに反することがただちに有利になり、フェアにと手を縛れば、即不利になるのだから、相互に、フェアというものに注意を怠らないことになるであろう。また、そういうきびしいところで、ときに、かならずしも実行しなくてもよい、したがって実行しなくてもペナルティをとられるわけでもないのに、高貴なフェアを実行することがあると、そのたぐいまれなフェアの精神は、いきおい目につくこととともなる。

3. 資本制では、基本は、競争

資本主義経済活動にいう戦いは、つぶし合うような闘争もあるが、基本は、競争であろう。それは、商品の生産と販売の競争である。一つの会社のなかでの社員たちの競争は、生産と販売についての能力・実力発揮の競争が中心となる。昇進などの競争も、そういうなかでの一環として位置付けられるものとなろう。社内での生産・販売の競争は、本質的には味方同士の競争として、

競争相手はまさに「よきライバル」にとどまって、うらをかいたり、おとしいれたりというような汚い手は、ふつうには、使わないであろう。利害は、根本において一致しているのである。競争相手のものたちがすぐれた生産・販売をすることは、会社のもうけが増えることになって、間接的には、自分の給料を増やすことにもつながるのである。競争は、助け合い、手を引き合いながら、各自の能力発揮を競う、比べるということになる。良好な人間関係、よい職場の雰囲気を維持するよう、相互に譲り合い、フェアに、つまり対等とか平等に気をつかいながら、もてる能力のできるかぎりの発揮を競うものとなることであろう。

これが相互に闘争関係になる場合は、相手のプラスは、自分のマイナスに、自分のプラス分は、相手のマイナス分になるという相容れない関係になるのであり、なかよくとはいかない。社長と会長が相互に辞職に追い込もうと画策するようなときなど、フェアにということは、まず考えられなくなる。生きのこるためには、相手を追い落とす以外にないとなれば、相手を陥れるために、いつわり、うらぎり、だまして汚い手を動員してでもということに、つまりアンフェアにさそわれがちとなろう。

資本制下の「闘争」というと、労使の関係は、しばしばこれまでは闘争的なものであった。多くの労働組合が、これを階級闘争と位置付けていた。戦いは、合法的にルールにしたがってその範囲内でということで、フェアな戦いになるのが普通であったが、ルールの認識は、かならずしも一致せず、相互にアンフェアだ汚いやり方だと、批判することも少なくなかった。時には、暴力的なものにもなり、暴力団をつかったりして、アンフェアも過激になることがあった。現在は、わが国では、労使の関係のその多くは、闘争的であるよりは、協調的なものになっている。しかし、社会主義崩壊で、資本は、労働側にゆずらなくてもよくなっているし、他社との競争できびしい経営を強いられ続けていることもあって、賃金切り下げなどで労働側と過激な闘争を再現するようなときがくるかもしれない。

企業間の関係も、商品の生産・販売の競争であるから、相互がぶつかるような事態にいたらないかぎり、お互いが商品を融通しあって助け合いながら、生産と販売を仲良く競うことが可能である。それは、商品生産が消費にまにあわず、ダブつかないところでは、起こっているし、故意にそういう状態をつくって、なかよくということも存在している。つまり、同種の企業間で販売地域をダブらないように分割し、生産量を相互に調整するという取り決めをすることによってである（公正な取引に違反し、あくまでも裏での、みにくいアンフェアな取り決めとなるが）。こういうかたちのものを維持したかぎりでの企業間の競争は、対立したり排除的になることが回避されているのだから、おおむねフェアなものとなりうるであろう。ただし、少数の企業での独占状態となるから、そこでは、競争そのものがなくなって、戦いの徳としてのフェアは存立の基盤を失い、その出番自体がなくなる。

生産が過剰になったり、販売が企業間でダブるようになったところでの競争は、これが資本制の競争の代表的な競争になるが、厳しいものになっていく。同種の各企業間おいて利害は相反するものになるから、ときには、相互が排除しあい、つぶしあうという闘争に転化することもある。商品の販売競争は、安売り競争となり、消費者には、ありがたいものとなるが、企業や商店にと

っては、きびしいものとなる。生産の競争の場合、より優れた製品を作り出して、そのことで他より先んじてという方向に向かうのが基本的な望ましい姿勢になる。そして、そのかぎりでは、この競争は、資本制の発展に資するものになる。だが、似たような商品である場合、販売は、熾烈な競争になって、利害は、相反するものになるから、そう悠長にはかまえておれないこととなる。相手を排除すればするほど自分には有利になるのだから、ここでは競争はアンフェアになりやすくなる。

4. 競争の終了としての独占化

経済的な競争が自由に展開されて、行き着くところまでいった結果は、最強の企業・資本による市場の独占となるのが通常であろう。最近、各地で大型店と個人の小商店との競争が生じていて、その結果、後者がなりたたなくなって、その商店街が閑散として、店をたたむようなことが起こっている。かつて、大企業・大資本が自由な競争をして、大きいものほど強いから弱い企業を倒して独占化していって、最後は最強者・独占企業のみが生き残るというようなことがあった。そして結果としては、それで競争相手がなくなり、独占企業によって、独占価格をもって暴利がむさぼられることになった。

多くの競争・闘争では、勝者・優勝者が最終的に決定されて、そこで戦いを終わりとする。しかし、スポーツの場合、その一つの大会での優勝者を確定して競争を終えるのだが、かれは永遠に優勝者なのではなく、次回は、また、ゼロからやりなおして、競争をしなおすので、競争は、永続的にくりかえして可能となる。企業内の社員同士の生産・販売の競争は、スポーツと同様にくりかえしが可能なものである。また、昇進の競争も、年々、上司となる者たちが退職して入れ替わるので、なんとか競争そのものを維持していける。

だが、企業同士の競争の場合、最強者が独占すると、それは、そのままに独占がなかば永遠に維持されることになって、競争そのものが存在しえなくなってしまうのである。かつての資本制は、国内においては、そういう独占状態をつくりだして競争を停止するようなことになっていった。これに対して、独占の目に余る弊害を経験するなかで、健全な資本制の展開を可能にするため、独占の禁止が資本主義諸国でうたわれて今日にいたっている。現在は、完全独占を拒否する体制になっているので、企業間の競争も、停止することなく、永遠に競争可能となっている。したがって、また永遠にフェアのいいうる状況となっているということができる。

この点で、現在、市場開放をもとめて、国際間でフェアをいうのは、問題がないわけではない。かつて国内に独占が出現したのは、競争の結果であった。フェアに対等にという競争では、大企業ほど有利となって、というか競争のなかで強いものほど大企業化して（一部の業種では、こまわりのきく小企業の方が有利なこともあるが）、フェアであればあるほど強いものが勝利を確実に手にすることになり、それが唯一の勝ち残りとなり独占化して競争は終了してしまうのである。今日、国際的にこれに似た状況が再現されつつあるともいえる。つまり、弱小の国の弱小企業は、アメリカの大企業とのフェアな競争では、おそらく負ける以外なく、その限りでは、フェアな自由競争のもとではアメリカの多国籍大企業による世界の独占となって競争を終わることになり

かねないのである。資本制は、国内では、独占を禁止している。つまり、ある限度を超えて独占化するような場面になると、フェアなかたちでの競争を停止するのである。最強者のみが勝ち残って競争終了ということにならないように、その限りでは大企業に対して不利な、いうなら「アンフェア」の工夫をしているのである。国際的にも、そのようなことを配慮していく必要があるのかもしれない。

農産物をアメリカが独占的に生産・販売するようなことになると、その弊害は、単にその独占的な農産物の価格つり上げなどの問題にはとどまらず、輸入食料に依存する国家の自立性は危うく国家そのものの存亡の問題にまでなっていく可能性がある。さいわい、植民地の形態をとらず、独立国家が支配的になっている現代のばあい、国家間の障壁は高く、アメリカの多国籍大企業であっても、他国を全面的に支配することはそう簡単ではない。しかし、フェアに自由に競争することが進んで行くと、農産物などの一部の分野ではアメリカの独占するところとなりかねないのも事実である。そういう場合、健全に競争を維持しようと国内において独占禁止の体制をつくったように、国際的にもなんらかの独占禁止の措置が、したがって、フェアな取り引きの、いわばアンフェアな停止・禁止が考えられてもよいであろう。もっとも、経済活動が国家の障壁をこえて無国籍グローバル化していくなかでは、そのうちアメリカ合衆国の独占など心配無用となるかも知れない。しかし、そうなると、またそれで、無国籍のグローバル企業の独占化への規制がおそらく必要になる。

フェアは、戦いの倫理として、競争・闘争のないところには、不要のものであるが、資本制は、いたるところで競争原理をとりいれており、戦前は競争を終了させて独占化していた企業間の競争も、独占禁止とすることで、競争を永続的に可能としている。個人から大企業にいたるまで、現代の資本主義は、競争を根本的な活動形式とするようになっているといえよう。ということで、競争のあるところに存立するものとしてのフェアは、現代社会では、それがどの程度実現されているかは 問わないとしても、大切な徳目になりうる状況にあるということができるであろう。

5. 公平さの倫理

フェアは、戦いの場面での倫理になるが、その内容は、戦いの諸条件の対等・平等を求めるものになる。公平・公正である。スポーツでは、模擬戦としての枠を維持することと、戦いの諸条件の同等性を確保するために、その基礎的なものは、ルールにうたわれる。このルールの遵守がフェアということになり、このフェアは、基礎的なものとして、その厳守が大前提になっている。それへの違反は、その競技そのものの否定となることもあり、厳罰が科せられる。称賛されるフェアプレイといわれるものは、ルールにはない、より高い、ふつうには守られていないような、まれな公平・公正な態度にでたときのことになる。模擬戦ではなく、本物の戦争になると、勝利がすべてで、ルールもなにもなく、フェアなどナンセンスとなることが少なくないが、それでも、ときには、純粋な戦いをもとめ、あるいは、敵への敬愛のこころからフェアな戦い方をする者がでてくることもある。

資本制競争社会にいわれるフェアは、戦争でのフェアとちがい、守られなくても普通というものではない。まれにしかないというものではない。スポーツのそれのように、ルールとして確立されているものについては、一応は、守ることが当然となっている。また、ルールや約束にはない、より高い公平さについても、これを守り、高貴なフェアを達成する場合もある。だが、戦争ほどではないとしても、利害のからむ事柄で、汚い手でルール違反だとうしろ指をさされようと勝てばよいのだ、もうかればよいのだということもあって、わが国などでは基礎的なフェアすら守られていないことが少なくない。会社の存亡がかかっているようなとき、きれいなフェアなやり方をと自分たちの手をしばって悠長なことをしてなどおれない、アンフェアであろうと、競争にとにかく勝つことを第一としなくてはならないというようなことになるのは、資本制の企業では、まれな話ではない。

ところで、公平・対等といっても、何をもって対等、つまりフェアとするかは、かならずしも明確ではない。巨大店舗と個人の小店舗がまったく自由に競争する場合とか、巨人と小人がともに同じ素手で戦うばあい、これを公平・対等のフェアな戦いといってよいのかどうかである。巨人と小人が対等にピストルで対決するのなら、それは、フェアである。戦いの条件は同一となるからである。小人が戦車をもちだし、巨人が小銃で応戦するとしたら、アンフェアである。条件が異なるからである。では、両方がなにも持たずに対決するのは、どうなのであろう。明らかに、戦う前から、巨人の勝利は決定しているようなもので、ともに素手とはいえ、これをもってフェアな戦いと言うことには若干抵抗を感じざるをえない。

フェアは、純粋に戦い、強いもの・能力にすぐれているものが勝利するようにと、戦いを不純にする撹乱要因となるものを出来るだけ排除して、その条件を同一にしようというものであろう。そうだとしたら、撹乱要因を排除し純粋に戦って強いものが強いものとして勝利することがフェアであれば、巨人と小人が素手で戦うのは、フェアだというべきなのであろう。もし、巨人の目が悪く小人の目がよいばあい、ピストルで戦うとすると、小人が勝利する可能性が高い。それは、巨人がその戦いでは能力におとり、弱かったからであり、それはそれで、弱いものを敗北させて、フェアなのである。

スポーツでは、こういうとき、階級別にすることがある。あるいは、男女別の競技とするのもそれである。柔道やボクシングでは、体重別にする。重量のあるものとないものとでは、ほぼ、戦うまえから、重量のあるものの勝利と分かっているからである。なるべく互角の戦いができる相手と戦えるようにしようとの配慮である。だが、そうすることがフェアかどうかは、別の話であろう。階級別・男女別とすることは、体重や性の差をもって別にするのであって差別しているのであり、フェアのいう公平の精神からは、後退しているというべきで、公平さを欠く点では、アンフェアな仕組みといわれるべきかも知れない。

体重 59 キロの者と 62 キロの者がいて、62 キロの者が 59 キロの者より常に強くて勝っていたとしても、体重 60 キロで別の階級にされるとしたら、この階級別のもとでは、62 キロの者は入賞さえできず、59 キロの者は金メダルをもらうというような、弱い者の方が賛えられるアンフェアなことが生じうるのである。あるいは、かりに、女子軽量級のものがじつは参加者全体のな

かで最強だったとしても、男子重量級のものが最強という前提があっての階級別であるから、彼女は、軽い弱いもののなかの勝者にすぎないということになって、真の実力は、発揮されないで終ることになる。実力を発揮して最強のものが最強の勝者となるような純粋な戦いの場が設定されるべきであろう。それは、階級別・男女別をやめて彼女が重量のある男子とも戦えるようにすることである。そこで勝ちぬいてはじめて、彼女は、真実最強者であることを証明できるのである。その点、重量の問題に限ってのことだが、体重が柔道以上に勝敗と関係のある大相撲は、実に単純明快にフェアである。体重別をとらずに、軽かろうと重かろうと真に強いものが勝てるようにしているのである(番付で、実際には差を設けていて、あい似た強い力士同士が取り組むことになる。それでも、強ければ、いずれは、上位の強いものと対決できるのである)。軽いものは、不利になるであろうが、それも能力・実力のうちのひとつであり、代わりに技をたくみにしたり、筋力をつける努力をして、実力をつけて、巨人に小人が立ち向かって堂々と戦っているのである。

大規模店と、個人の小店舗の競争は、大相撲のようにするのが、一応は、フェアなものになるというべきであろう。ただし、なにもフェアでなければならないのではない。弊害が大きければ、ちょうど、独占禁止と同じく、ばあいによると、巨大経営に対しては、フェアな戦いを停止して、いわばアンフェアに巨大なものの手のみをしばることをしてもよいのである。

もっとも、別の考え方をすると、階級別もフェアのうちとも捉えられる。フェアの精神は、単に公平・平等というだけの形式的なものなのではない。フェアは、敵の手以上の手はつかわないで相互が対等にという謙譲の精神から、敵への敬愛の念からでてきているのである。思いやりがあり、やさしさがある。その根本の精神からいうと、勝負するまえから勝敗が決まっているようなところへ無慈悲に弱者をつれだしてなぐさみものにすることは避けて、敵対するものへの思いやりをもち、やさしさをもって、なるべく相互が互角に戦えるようにと配慮した階級別・男女別には、道理があるというべきかも知れない(大相撲の番付は、この点もちゃんと配慮していて、はじめから勝負の分かっているようなものは対決できないようになっている)。個人店舗が存続できるようになんらかの手だてを考え、巨大店舗の手のみを一方的にしばるのは、そういうことからいうと、フェアのうちのことになるであろう。

あるいは、「体重などの体力(強さ)の違い・差異は、戦いの条件の違いであって、これを放置して無差別にするのは、対等・平等の戦いというフェアに反する。体力の違いをなくして、同じ条件で戦えるようにすべきだ。それがフェアだ」と理屈を言うひとがいるかも知れない。しかし、かりに体力の差をなくすのがフェアで、それに基づいて階級別にしているのだとしたら、同一階級内の体力の差は放置しているのだから、やはり、階級別もアンフェアな戦いとなることであろう。はては、負けた方は、「負けたのは、体力の差が放置されたからで、アンフェアだったのだ」と言えることになる。勝敗が決したら、常に、「同じ条件・体力・強さでなかった、アンフェアだった」ということになる。フェアといえるのは、引き分けのみとなる。しかし、フェアは、結果の平等を求めない。強者の勝利を求めるものである。フェアは、体力のちがい・強さのちがいまでをなくして、同等化・平等化するものではない。強い者を強いものとして勝利させるために、

戦いの条件を同じにしようとするのである。弱いものが姑息な手段でもって汚い勝ちをとることがないようにと、純粋な戦いを求め、強者と弱者を勝敗をもって明確に区別しようというものであろう。対等・公平に純粋に戦うというフェアの形式からは、やはり、大相撲のように、小さくても創意工夫をして堂々とわたりあうのが、単純明快にフェアではある。

6. 商品の等価交換と公平さ

われわれの社会は、資本制商品社会であり、商品の等価交換を始源的な社会関係としてもつ。等価交換は、商品の公平な交換であり、商品を媒介にしての対等な人間関係の構築ということになる。商品関係とは、同価値のものを別の同価値のものと交換して、相互に損をすることなく、求める物を手にいれて得をするという仕組みで、しかも、かりに疎遠で敵対的なあいだがらにあっても可能なものとして、世界中にこの商品関係は浸透していき、その限りでは人と人とを対等な立場において結びつけて行った。商品社会は、その同等の交換関係を基礎にしている以上、不公平・不平等な関係を否定して同等な公平な関係を維持すべきことを求めているといってよいであろう。公平なフェアな関係が商品経済の基礎的な関係になるのである。

また資本も、どこの資本であろうと、同じ資本として、差別はなく、同等にあつかわれるものであろう。企業や商店は、利益をだし、もうけるために活動しているのであり、資本は、そこで「もうけ」がすくなくなったりすると、どんなところへでも、もうけの多いところへと流れていく。企業からいうと、安くお金を貸してくれる銀行ならどこの銀行でもよいし、銀行からいうと、確実にもうけになる企業なら、どんな企業でもよいのである。企業にとっては、どの資本も同一であり、資本にとっては、どの企業も、もうけのためにのみあるものであって、同一である。資本も企業も、すべて同等であり、どれかが特別扱いされ優遇される理由はない。資本制においては、公平さ・平等がその土台にあるということができるであろう。

この資本制下の市民の関係は、商品社会の対等の関係を普遍化した形であり、相互に対等である。封建制の身分制度のもとでは、ひとは、対等ではなかった。だが、資本制は、差別的な身分制度をもたない。自立したアトム的な個人として、万人、同等の一者とみなされ、各人は、自由におのれの実力でもって生きていくことが求められる。各個人は、その者のもつ能力・実力をもって評価される。経営者としては、彼がどれだけ巧みに企業を組織し、利益をあげていくかが問題であって、彼が貴族の出であろうと、貧困な庶民の出であろうと、そういうことでは差別するものではない。競争者は、ほぼ対等に並んでいて、勝敗は実力しだいであり、その実力発揮において各個人が社会的に評価されるのだから、競争心・向上心にとむ者には、刺激的な社会である。競争するに好都合な社会である。技術者・労働者としても、それぞれの実力が問われるのであって、それ以外の点では無差別平等である。市民として、彼らは、自立した一者であり、それ以上でも以下でもなく万人、無区別同等である。市民としての対等・平等は、資本制のもとでの基本的な人間関係を形成しているといってよいであろう。

ただし、自由な自立した個人として対等に競争して、能力あるものは、社会的にめぐまれた地位をえることになり、その力のとぼしいものは、しいたげられた地位にあまんじなくてはならな

いという差別を結果することになる。資本制の平等・公平さは、結果のそれではない。富みの分配の平等ではない。富みの生産・獲得における競争の形式的な平等・公平さである。

しかも、その競争のやり方そのものは、出発点が対等であればあるほど、その勝敗は戦いのなかでの巧みな展開にかかってくるから、きびしいものとなる。億万長者か破産か、生か死かになるような局面になれば、戦いに勝利するのに、きれいとか汚いとか悠長なことはいっておれない、アンフェアといわれようと、どんな手を使ってでも勝てばよいということになりやすい。もともと商人たちは、下賤な身分におかれていて、損得の前ではフェアなど意味がなく、きれいなフェアな戦いをほこる騎士や武士などとは無縁で、とにかく勝てばよい、儲かればよい、ということになりがちであった。金銭は、お金もうけは、下賤なものであり、資本はもともと汚いもので、そんなものに道徳や倫理などを求めることはできないとまでいわれた。しかし、二つの世界大戦をひき起こして、資本制も様変りしてきた。経済的な戦いについて、フェアをいうようになってきたのである。高貴な身分が消滅し、みんながお金もうけに汗をながす時代となり、経済活動は重要な営みと評価され誇らしい仕事とみなされて、自分たちがだんだん高貴になってくるとともに、汚いふるまいは表面的には控えられるようになってきた。また、経済の平和的な展開のためには相互に自制し秩序・ルールをもってやることが必要と自覚され、この秩序の枠内で、つまりはフェアに競い合うことを当為とし理想にかかげるようにと時代は変容してきたのである。もともと、商品社会の基礎をなす商品交換の関係は、対等なものの関係であったし、自立した市民は、同一の存在として対等・平等であって、戦いの条件の対等性というフェアは、資本制市民社会が根底においてもっていて、それがおのれの活動様式を実現し得るときとなったのだといえようか。

なお、この資本主義的競争におけるフェアの存立は、経済内的な展開としてそうなってきたのだろうが、それとともに、それのそとにある根本秩序としての「民主主義」が大きな力となっていることを指摘しておかねばならないであろう。この民主主義は、資本制社会の生み出した自立した自由な個人とその組織の基本秩序として成立している。自立した個人の相互の関係は、対等で平等なものとしてあるのが理想であろうが、民主主義はこの平等を根本規定とする。平等の民主的精神は、今日、いたるところに貫徹されていて、それが競争のなかに浸透するとき、平等な競争、つまり「フェアな戦い」となる。入試のフェアとか、就職に際してのフェアは、この平等を求める民主主義からの批判に応え、民主勢力からの非難に応えてなっているものであろう。経済活動のなかでの「フェアを守れ」の声も、この民主主義の精神がこれを言わしめ、これを支えているところが大きいのではないかと思われる。

7. 戦いを欠く公平さはフェアにならないが・・・

企業活動はかならずしも戦いでも競争でもなくて、共同し協調しながらうちでもそとでも公平・公正に穏和な日常活動を展開していることの方が多い。そこには、公平・平等・公正な活動はあるが、否ありあふれているけれども、それは、フェアとはいわれない。フェアは、戦いのなかにのみ存在するからである。フェアは、厳しい闘争・戦いのもとにあって、自分をひいきして、相手を倒したいという強い欲望のうずまくなかにありながら、逆にこれを抑制して自他を平等に

ともっていくものである。利己・自己保存欲と格闘し、これを抑圧して、公平さをとらねばと意志するのがフェアである。フェアは、相手を倒そうとするところで、同時にこれを制限し自制するという矛盾したところがある。結果についても、公平に平等に戦いながら、勝つか負けるかという不平等・差別をもたらそうという、矛盾したものとなる。フェアは、公平・平等であり、その相手に謙譲・敬愛の念をうちにもつものだが、それは、(平等や敬愛とは相反する)戦い・競争というものがあってのことで、戦いのないところでは、平等や敬愛の念があっても、フェアそのものは、存在しないのである。和気あいあいと平等・公平になることの多い日常的な経済活動においては、公平な事実はありあふれていても、それは、フェアとはみなされないわけである。

わが国は、資本制社会であるが、この日本的な資本主義のもとにはあまりフェアのことばが聞かれないできた。商売はきたないもの、お金を云々するのは下賤なことという古い時代からの観念の存続とか、明治以降の過酷なまでの収奪・あくどいもうけ主義に起因するアンフェアのイメージの残存などが背景にありそうである。しかし、最近になっても、なおフェアの声は、アメリカなどにくらべるときわめて少ない。いまだに「フェア」のことばを聞くことが少ないその一つの理由は、おそらくは、公正さ・平等(つまりフェアの内容)がないからではなく、フェアの存立条件である戦いが、厳しい経済的な闘争・競争が、スポーツなどとちがって少ないことにあるのではないか。わが国では、「和をもって貴しとする」の聖徳太子のむかしから、今日の資本主義にいたるまで、和・協調の精神が大切にされてきた。自由な競争からなるはずの資本制になっても、それが強く、各個人が主体的に前に向かって競争していくのではなく、周囲にあわせ同一歩調をとって、遅れないように、かつ前にでしゃばらないようにと気をつかってきたのである。

この日本にくらべて、アメリカでは経済活動でフェアがよく問題にされているように思われる。アメリカは、世界一の競争社会であって、厳しい競争・闘争が個人間でも組織間でもあるから、戦いを存立の条件にするフェアがしばしば取り沙汰されることになっているのであろう。また、わが国で最近になって、以前よりはフェアが話題になることが多くなっているとしたら、それは、おそらくは、アメリカ式に方々で競争が激しくなってきているからではないか。

このアメリカ的な雇用や経営が支配的になって、我が国が徹底した競争社会になっていくとしたら、フェアは、それなりに広く受け入れられ実行されることになるのではないかと思われる。フェアは、その前提に競争・闘争というものがなくてはならない。それは、いまのところ日本では日常生活では、少なく、逆の共同・協調のなかにいることの方が多いのだが、しだいに競争制度が社会に広く浸透しつつある。他方のフェアの要件としての公平さ・平等・対等性については、我が国の場合、自立した一者のあいだの対等性ということではないが、周囲に協調して和のなかに生きるものとして、となりの人と自分は同じだという、人間みな兄弟というような同等・平等感が根強い。対等・平等には、気をつかい、依存的で周囲や関係者に気をつかい、こまやかに人のこころを気づかうのが得意である。「戦い」という前提条件が一方に成立して、社会関係における「同等性」がしっかりと維持されているとなれば、戦いの諸条件の平等・対等としてのフェアということになる。つまりフェアの精神は、盛んなものになると考えられるのである。ただし、欧米のような自立した個人同士の、自尊心にとむ独立者同士の戦いというよりは、相手のことを

こまやかに想いはかるもの同士の戦いとなろうから、同じくフェアといっても、欧米のは、自尊心を中心に成立したフェアとなり、われわれのは、敵・他者への敬愛の念を中心にしたフェアになると特徴づけられることになるかもしれない。

我が国の武士たちは、敵への敬愛の念をもち、フェアな戦いをもとめることがあった。勝つためになら何をやってもよい、戦いは敵をだましあざむいていくところにあるという孫子的な考えは、必ずしも一般的な承認を得られなかったのではないか。これから日本も厳しい競争社会の中に入っていくのだとしたら、戦いの道徳としてのフェアは、しばしばこれを耳にするようになっていくのだろう。ただし、社会生活における戦いは、相手に打撃を与え打倒していくような闘争ではなく、あい競い能力を伸ばしあう競争にとどめておきたいものである。そして、できることなら、戦いのなかでの自尊と敬愛の念からなるフェアの話よりは、共同・協調のもとで、自尊の心と他者敬愛の念にあふれた共生的個人のエピソードが多く語られるような、そんな平和な社会にして行ければと思う。

平成 10 年 9 月　『HABITUS』（西日本応用倫理学研究会）1998 年 9 月号　57~78 頁